「万博道」工事 民家に亀裂

高速道路・淀川左岸線２期工事について何回もレポートしてきたが、写真の毎日６日の記事に目がとまった。抜粋して紹介する。

「万博道」工事 民家に亀裂

阪神高速 淀川左岸線

軟弱地盤 大阪市対策ミス

構想から半世紀

連日、「震度４クラス」の揺れが 79 歳の女性宅を襲った。地震ではない。2025 年大阪・関西万博のアクセス道路にもなる高速道路の建設工事が原因だ。家の門や花壇にひびが入ってしまった。「調査が甘かった」。事業主体である大阪市の松井一郎市長も陳謝した巨大プロジェクト（淀川左岸線）の誤算とは―。

初めて計画が公表されたのは 1967 年。２期工事の区間は当初、高架にする予定だったが、近隣のマンション住民らが反対して 96 年にトンネル化する計画へ変更された。

その後、阪神高速の事業費見直しや市の財政難で計画が一時ストップしていた。だが、経済界の要望もあって息を吹き返す。工法は、堤防の中にトンネル（片側２車線）を通すという世界に類を見ないものが採用された。事業の安全性を審査する有識者会議でも計画や工法が認められ、18 年に着工した。市にとっては構想から半世紀以上にわたる悲願の事業だ。当初の事業費は約 1162 億円で、市と国がほぼ折半することになっていた。開通は 27 年春の予定だ。

さらに万博開催が決まると、松井市長は完成を前倒しすると表明。JR 新大阪駅や大阪駅から万博会場の人工島・夢洲へのアクセス道路として、シャトルバスに限定し先行利用する考えだ。そんな工事で住民に迷惑をかける事態になってしまった。

ひび割れを生じさせるような揺れが起きた原因は、地盤改良工事だ。現場は軟弱地盤のため、補強用にくいを地中に打った。ところが、事前調査で想定した以上に地盤が緩かったため、くいを打ったことで周辺地盤にも影響を与えたとみられている。市は、軟弱地盤対策をセメントの注入に変更するなどの見直しを迫られており、万博までの完成は不透明になっている。

こうした想定外の軟弱地盤や土壌汚染により、事業費は当初の想定から 2.5 倍の約 2900 億円に膨れ上がっている。万博に間に合わない場合は、さらに数十億円かけて代替路を整備する案も浮上している。市の担当者は「工事自体が遅れても、何とか万博には対応できるようにする」と話す。

大阪市の公共事業は長年、緩い地盤に悩まされてきた。最近も IR カジノの予定地となる夢洲で地盤沈下や液状化のリスクが判明している。

大阪市特有の土地問題であり、公共事業のコスト上昇、地元負担膨張の構図である。

（2022年５月９日）